様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月３日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720060
研究課題名（和文）　フランス２０世紀文学における非西欧世界へのまなざし

研究課題名（英文）　Representation of the non-Western world in 20th century French literature

研究代表者
鈴木　雅生（SUZUKI MASAO）
共立女子大学・文芸学部・専任講師
研究者番号：30431878

研究成果の概要（和文）：
現代フランス文学を代表する作家ル・クレジオが非西欧世界に向けるまなざしを、第一次大戦以降現在に至るまでのフランス人作家におけるそれと比較する本研究は、個別作家研究というミクロな観点と、文化研究というマクロな観点の両方を通じて、フランス 20 世紀文学のなかにおけるル・クレジオの位置を確定すると同時に、現代に至るまでフランス文学に連綿とつづく「脱西欧の系譜」を浮き彫りにすることを試みた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research, which consists in comparison of Le Clézio's way of looking at the non-Western world with other French modern writers, is to determine the position of Le Clézio in the 20th century French literature, and to describe the tradition of the French writers who want to get out of the Western world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	300,000	2,000,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：フランス文学、ル・クレジオ、エグゾティスム、非西欧世界の表象、近代批判

１．研究開始当初の背景

近代以降の西欧を牽引してきたフランスにおいては、非西欧世界との相互交渉 —— 接触、浸透、協力、摩擦、反撥、衝突 —— を通して、西欧にとっての「他者」というものが文学における表象として大きな位置を占めてきた。18 世紀ではモンテスキューの『ペルシア人の手紙』やディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』、19 世紀ではユゴー『東方詩集』、フローベール『サランボー』あるいはピエール・ロチやセガレンのエグゾティスムなど、文学史上に名をとどめる作品を概観するだけでもその例は枚挙に暇がない。20 世紀になると、人的・物的交流の活発化と歩み

をあわせるように、非西欧世界の表象はフランス文学のなかで重要な一翼を担っていく。

このような観点からすると非西欧世界へと向けられたまなざしは近代以降のフランス文学におけるひとつの常数としてとらえることも可能ではあるが、その内実を詳細に検討していくと 19 世紀までの文学と 20 世紀以降の文学では、このまなざしに大きな差異があることに気づく。それまでは西欧そのものの否定としてではなく「他者」に投影した西欧の憧憬にすぎなかった非西欧世界が、第一次世界大戦後、西欧中心的価値観に疑義が呈されると期を一にして、別の価値観 ―― 袋小路に陥ってしまった西欧近代的価値観とは異なる価値観 ―― の具現化として表象されるようになる。19 世紀までの文学において西欧の自己確認装置として機能していた非西欧世界は、20 世紀以降、西欧を否定しその価値観を転倒させる装置として機能するようになるのだ。

したがって本研究「フランス 20 世紀文学における非西欧世界へのまなざし」は、20 世紀の文学をそれ以前の文学の延長線上に位置づけ、「他者」がどのように表象されているかを分析する、というこれまでなされてきた研究とは方向性を異にする。そのような研究の成果を踏まえたうえで、20 世紀のフランス作家が西欧近代のどのような価値観に否を突きつけ、何のアンチテーゼとして非西欧世界を提示しているのか、という点に着目する。

２．研究の目的

本研究が最終的な目的とするのは、非西欧世界に向けられたまなざしを通時的に分析することにより、20 世紀フランスの精神的風土の連続性と変遷とを、文学に焦点を当てながら炙り出すことである。

しかしここで問題となるのは、あらかじめ構想した「脱西欧の系譜」のなかに個々の作家・作品を当てはめることではない。このようなアプローチには、個々の作家の個別性を捨象し、一般論に陥る危険があるからだ。この危険を避けるため本研究では、脱西欧的、文化人類学的な相対化の視点を体現し、フランス現代文学を代表する作家の一人であるＪ・Ｍ・Ｇ・ル・クレジオ（1940-）を軸とすることで、20 世紀のフランス文学史における「脱西欧の系譜」を逆照射することを試みる。

そのために、ル・クレジオに影響を与えた先行作家であるミショー、アルトーを糸口としながら、それにとどまらず第一次大戦以降現在に至るまでのフランス作家を幅広く検討し、彼らが非西欧世界に向けるまなざしがどの点で共通し、どの点で異なるのかを明らかにしたい。この作業を通して、フランス 20 世紀文学のなかにおけるル・クレジオの位置を確定することが可能になると同時に、ル・クレジオに至るまで連綿と続いている「脱西欧の系譜」が明確に浮かび上がってくるはずである。

３．研究の方法

20 世紀のフランス文学は、以前の諸世紀にくらべてはるかにはっきりと時代の変遷そのものと相呼応しており、政治史的社会史的区分と対応させて 3 つの区分をたてることが可能であろう。すなわち、「第一次世界大戦までの文学」、「両大戦間期の文学」、「第二次大戦後の文学」、である。本研究では、第二次世界大戦後の文学のなかでも特に 1980 年代以降のものを、「現代文学」、として分類し（この理由は後述する）、合計 4 つの時期区分を設定した上で分析を進めていく。

まずはじめに 19 世紀文学における非西欧世界の表象と 20 世紀文学におけるそれとを比較検討しながら、本研究全体の枠組みを明確化することを目指す。

西欧から非西欧世界へと向けられるまなざしが大きく転換する契機となったのは、第一次世界大戦であるだろう。欧州全土を巻き込んだこの戦争による混乱は、戦後、多くの知識人の精神に『西欧の没落』（シュペングラー）を意識させ、20-30 年代には「瀕死の西欧文明」をめぐる考察が一種の流行となっていた。このようななか当時の作家や知識人は、非西欧世界、特に東洋が、西欧に欠けている価値観を体現しているものとして高く評価するようになる。1925 年には雑誌『レ・カイエ・デュ・モワ *Les Cahiers du mois*』が「東洋の呼び声 Les Appels de l’Orient」と題する特集号を刊行する。ジッド、ヴァレリー、クローデル、ブルトンといった当時を代表する作家たちも寄稿しているこの雑誌を糸口に、20-30 年代の作家の西欧近代批判、およびそれと対になった非西欧世界への関心を幅広く分析することで、まずは「両大戦間期の文学」における「非西欧世界へのまなざし」の特徴を抽出する。その際、ル・クレジオに大きな影響を与えたアルトーおよびミショーに関しては、特に焦点を当てて考察することになるであろう。また、この時代の思想・文学に多大な影響を与えたシュルレアリスムについての知見を広げるために、シュルレアリスム研究会等などで専門家と積極的に意見交換を行う。

この作業と平行して、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて作品を発表したピエール・ロティやセガレンといった作家を通して、エグゾティスムについて検討する。彼らにとっての非西欧世界は、自らが属する「西欧」そのものの否定としてではなく「他者」に投影した西欧の憧憬として想定されている点において、それまでのフランス文学の流れを汲む

ものであろう。この「第一次世界大戦までの文学」の分析によって、第一次世界大戦以降に顕在化する 20 世紀的な「非西欧世界へのまなざし」と、それ以前のものとの差異を明確に浮かび上がらせることを試みる。この作業を効率的に遂行するためには、19 世紀フランス文学、特にオリエンタリスムやエグゾティスムに関わる研究を行っている専門家と積極的に意見交換を行う必要があるだろう。

以上のような作業によって得られた成果に立脚しながら、次には第二次世界大戦以降のフランス文学における、西欧近代批判と対になった「非西欧世界へのまなざし」を検討したうえで、20 世紀フランス文学を貫く「脱西欧の系譜」を最終的に析出することを試みる。

1960 年代以降のフランスにおいては、レヴィ＝ストロースやフーコー、あるいはバルトなど、いわゆる「構造主義者」の活躍とともに西欧近代的価値観が徹底的に批判されていく。このような思想上の流れと有機的に結びつけながら、「第二次大戦後の文学」を検討していく。1963 年に『調書』によってデビューしたル・クレジオは、この問題を検討するうえで好個の例であろう。当初、西欧の枠内に留まりながら西欧近代的価値観に対する違和感を表明していたル・クレジオが、70 年代以降、インディオたちが住む中南米という非西欧世界へとまなざしを向けるようになるのは、それまで「未開」とされてきた世界が、文化人類学の興隆によって新たな相貌をまとって立ち現れてきたことと無関係ではない。この観点から、まずは 60-70 年代におけるル・クレジオの西欧近代批判の展開を、同時代の思想状況と関連づけて明らかにする。その際には、歴史、思想、社会など、20 世紀フランスに関わる専門家に協力を仰ぎ、必要に応じて研究打ち合わせを行い、専門知識の提供を受ける。

しかし、本研究が目標とするのはル・クレジオという個別作家の研究ではなく、20 世紀のフランス文学を「脱西欧の系譜」という観点から捉え直すことにある。したがって、ル・クレジオにおける西欧近代批判と非西欧世界へのまなざしを検討する作業と平行して、トゥルニエ、デュラス、ベルナール＝マリ・コルテスといった同時代の作家の西欧近代批判と非西欧世界へのまなざしの特徴を分析し、それぞれの差異と共通点を浮き彫りにすることを試みる。

1980 年代以降になると、フランス文学における非西欧世界の表象に新たな要素が顕著になる。これまでも見られた、西欧内部からの西欧批判を核とする非西欧世界への関心に根ざす作品に加えて、非西欧世界出身の作家がフランス語で自らの世界を描く作品が、フランス文学の中で重要な一翼を担うようになるのだ。のちにゴンクール賞を受けることになるタハール・ベン・ジェルーン（『聖なる夜 *La Nuit sacrée*』、1987 年受賞）といったマグレブの作家、ラファエル・コンフィアン（『テキサコ *Texaco*』、1992 年受賞）といったクレオールの作家が活躍をはじめるのはこの時期からである。したがって「現代文学」の分析に当たっては、フランス人作家が非西欧世界に向けるまなざしを検討する一方、クレオールの作家やマグレブの作家が体現している、西欧の外側から西欧を対象化・相対化しようとするまなざしを考察する。

以上のように個々の作家のテクストを詳細に読解することで、20 世紀フランス文学における西欧近代批判と、非西欧世界へ向けられたまなざしとを分析すると同時に、全体を総合する視点を検討しながら、最終的には「脱西欧の系譜」を浮き彫りにすることを試みる。

４．研究成果

研究代表者は、ル・クレジオの思想と文学の展開を跡づけた研究書 *J.-M.G. Le Clézio : évolution spirituelle et littéraire. Par-delà l'Occident moderne* を 2007 年にフランスの L'Harmattan 社から上梓した。現在までのル・クレジオ研究では、何らかのテーマ軸に沿った共時的研究、あるいは個々の作品分析が主流となっており、ル・クレジオの作家としての営みが、どのように変化・発展してきたのか、という根本的な問題は等閑に付されてきた。また、60 年代の初期作品、70 年代の「変容」過程の作品については、80 年代以降の作品との関係のなかで論じられることが多く、充分にその意義が検討されているとは言えない。このような研究の現状において本書では、ル・クレジオの全体像を把握するためには、作家の思想と作品の変化を辿りなおす必要があるという認識に立ち、作品世界の通時的分析を通して、各時期におけるル・クレジオの問題意識を解明した。これまで単なる芸術観の転換として捉えられる傾向にあった作品世界の変容を、作家の存在論的探求と結びつける点において本書は画期的であり、フランス本国でも近年ようやく端緒の開けたル・クレジオ研究に斬新な通時的展望を開くとともに、脱西欧の系譜学を構想することで、一作家の研究をフランス近代文学史ないし西欧近代文明史の文脈へと大きく開くことに成功した。

2008 年には本研究の主要な対象であるル・クレジオがノーベル文学賞を受賞したこともあり、当初の研究計画を若干変更して、ル・クレジオに関する考察に研究の重点を置くことになった。フランスの文芸雑誌 Europe 誌が 2009 年 1 月にル・クレジオの特集を組んだ際には寄稿を要請され、作家の思

想上・文学上の変遷を「越境」の観点から論じた «De la claustromanie au nomadisme : l'origine du goût de l'ailleurs chez Le Clézio» を発表した。
　また、ル・クレジオ文学の大きな転換点となった 1978 年発表の作品『地上の見知らぬ少年』を翻訳したのに伴い、当作品の詳細な分析を「訳者あとがき」等で試みた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①鈴木雅生、「訳者あとがき」（ル・クレジオ『地上の見知らぬ少年』、河出書房新社）、査読無し、2010 年、349-356 頁
②鈴木雅生、「ル・クレジオ『地上の見知らぬもの』について」、『研究ファイル』（共立女子大学）、査読無し、第 37 号、2009 年、8-14 頁
③Masao SUZUKI, «De la claustromanie au nomadisme : l'origine du goût de l'ailleurs chez Le Clézio», *Europe*, 査読有り, nº.957-958（合併号）, 2009, p. 69-81

〔図書〕（計 1 件）
① Masao SUZUKI, *J.-M.G. Le Clézio : évolution spirituelle et littéraire. Par-delà l'Occident moderne*, L'Harmattan, 2007, 289p.

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　雅生（SUZUKI MASAO）
共立女子大学・文芸学部・専任講師
　研究者番号：30431878

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし